ドラポケストーリー

Star

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラポケストーリー

【Ｎコード】
Ｎ１３１６Ｚ

【作者名】
Ｓｔａｒ

【あらすじ】
のび太のふとした一言で、
ポケモンＢＷの世界に
行くことになった５人。
ここにドラえもんたちの
大冒険が始まる！

第1話―プロローグ―（前書き）

はじめまして。
Ｓｔａｒと申します。
至らない作品ですが、
温かい目で見守って下さい。

それではどうぞ！

第1話―プロローグ―

とある空き地にて
ポケットモンスターB・Wを
する少年少女がいた。

「行けぇ！俺様の分身、エンブオー！！“フレアドライブ”だ！！」
この少年は、剛田タケシ。
通称ジャイアン。

「ああっ！　僕のジャローダ！！」

この少年は野比のび太。
駄目人間である。

「やっぱりジャイアンは強いよ！！」

この少年は骨川スネ夫。
ジャイアンの子分である。

「のび太さん、落ち込まないで
惜しかったわよ。」

この少女は源しずか。
みんなのアイドルである。

「うぅ…、ほ、本物のポケモンの世界に行けば、僕が絶対一番なんだからね！！」

と、根拠の無いことを
言い出すのび太。

「のび太がぁ！？　無理無理、
そんなの無理に決まってる
じゃねーかよ！」

「そうだそうだ！！　僕らのうちの誰にも勝ったこと無いくせに、
生意気だぞー！！」
ゴリラとキツネから
馬鹿にされたのび太。
こうなればもちろん…

「うわあああああああん！！！
ドラえもぉぉぉぉぉぉん！！！！！」
という風に、泣いて家に帰ってしまった。

余談だが、
全員のバトルスタイルを
少し説明しておこう。
ジャイアン――
基本的にはフルアタ。
補助技は一切使わないタイプ。
スネ夫――
超嫌がらせタイプ。
どくどく→かげぶんしん　や、やどりぎ→みがわり　などの
鬼畜コンボを使いこなす。
彼とバトルしたジャイアンが
自分のＤＳをへし折るという
事件が有ったくらい鬼畜。

しずか――
４人の中では、一番まとも。
積み技を使ってから攻撃するタイプ。
また、眠らせたり麻痺にしたりという風な戦い方をする。

のび太――
駄目。何もかもが駄目。
まだロクにタイプ相性も
特性も理解していない。
［物理］と［特殊］も、
イマイチ理解していない。
例えば、シビルドンに
“じしん”を使ったり、
ハピナス相手に、
特殊技で倒そうとしたりする。
おかげで今まで０勝。

―のび太の家―
ここに寝ころびながらどら焼きを食べる、パッと見はタヌキに見えかねない
自称ネコ型ロボットがいた。

「ドラえもぉぉぉぉぉん（泣）
現実にポケモン出してぇ！！」

ものすごい勢いで、階段を
駆け上がってきたのび太。

「なに言ってるの、のび太君。

そんな事出来るわけ……」
急に言葉を詰まらせたドラえもん。
「あった！！出来るよのび太君！」
「ホントっ！？」
ドラえもんの肩をつかんで
そう尋ねたのび太。
「もっちろん！え～と…」
自分のお腹に着いている
ポケットをゴソゴソと探す
ドラえもん。
そして探していたものを
引っ張り出す。
「“もしもボックス”～！！」説明しよう！もしもボックスとは！
ボックスの中に電話機があり、
その電話機に
「もしも～だったら」という
事を言うと、その「もしも」を
現実にするひみつ道具である。
「そうか！これでこの世界を
ポケモンの世界に入る
つもりなんだね？」
「そう言う事。さ、わかったら
みんなを呼んできて。
のびた君だけじゃつまんない
でしょ？」
分かった――
と言って、のび太は
部屋を飛び出していった。

～２０分後～

「おう、ドラえもん！
“もしもボックス”で
ポケモンの世界に入るって
ホントかよ！！？」
「もし嘘だったら、
タダじゃおかないぞぉ！」
「でも、本当なら
私すごく楽しみだわ。」

のび太が呼んできた３人が
部屋に集結した。

「もちろんホントだよ。
さぁ、みんな中に入って。」

もしもボックスの中に
入るように促すドラえもん。
ドラえもん　のび太　ジャイアン　スネ夫　しずかの順に、
全員がボックスの中に
入っていった。

「それじゃあ行くよ。
“もしもボクたち５人がポケモンの世界に入れたら”！！！」

ドラえもんがそう言うと、
ボックスの中のベルが鳴り、
周りが急に暗くなった。

そして、のび太達5人の
大冒険が始まったのである。

第2話―5人のパートナー選び―（前書き）

第2話更新しました。
今回は5人の
パートナー選びの話です。

それでは　どうぞ！！

第2話―5人のパートナー選び―

全員が気がついた時には
もしもボックスは、
カノコタウンのど真ん中に
到着していた。

「どうやら無事にポケモンの
世界に来れたみたいだね。」
ほっと胸を撫で下ろす様子を
見せたドラえもん。

「そんな事よりサッサと
ポケモンを貰いに行こうぜ！！
俺様は冒険がしたくて
たまらねぇんだ！！」

「ジャイアンの言う通りだよ。
確かアララギ研究所に
ポケモンが有るんだっけ？」

ポケモンの世界に来てがなり
テンションが上がっている
ジャイアンとのび太。
こういう所は気が合うようだ。

「分かった。
じゃあ、早速アララギ研究所へ向かおうか。
みんなついて来てね～！」

ひみつ道具の所持者である
ドラえもんはある程度の
地理は知っているようだ。

そして歩くこと１０分…

５人はアララギ研究所の
目の前にいた。

「なんだかかなり歩いた気が
するわ。ゲームじゃこんなに
離れていなかったわよね？」

もっともな疑問を
ドラえもんにぶつける、しずか。
「もちろんその辺の設定は
施されているよ。だって、
現実じゃ、早い人だとゲームを
１５～１６時間でクリアしちゃうんだよ？
そんなに短かったら
楽しくないからね！！」

と、しずかの疑問に答える
ドラえもん。

「さっすがドラえもん！
楽しみ方を分かってるねぇ！
いよっ！　世界一のネコ型ロボット！」
スネ夫がドラえもんを

おだてると、

「いやぁ～。
それほどでもあるんだけどね！
あはははははははは♪」

完全に調子に乗ったドラえもんである。

「おい！いい加減中に入ろうぜ！
ポケモンが俺様を待ってるんだぜぇ！！」

こちらもかなり
舞い上がっている様子である。
「別にジャイアンを待ってる
わけじゃ無いだろうに（ボソッ」

「なんか言ったかぁ！！！
の・び・太・く・ん！！！」

ボソッと呟いたつもりなのに
地獄耳のジャイアンには
聞こえてしまったようだ。

「ひゃぁぁっ！！？
ななな、何も言ってないよっ！」
必死でごまかすのび太。

「ならいいんだ」　と　言って
荒くなった鼻息を戻す
ジャイアン。

「じゃあそろそろ入るよ！」
ドラえもんの号令で研究所の
扉に全員が向き合った。
「こんにちは！ポケモン下さい」
5人で見事にハモった台詞。
すると中から、
若そうな女性が出てきた。

「ハーイ、ヤングボーイに
ヤングガールに…あ～…
ヤングタヌキ？？」

「誰がタヌキだ誰がっ！！！
僕は優秀なネコ型ロボット
なんだぁぁぁっ！！！」
アララギ博士の一言に
怒りを覚えた様子の
ドラえもん。

「まぁまぁ、
落ち着いてドラえもん。」

のび太の必死の説得で
何とか落ち着いたドラえもん。
そして、そろそろ本題に
入るようだ。

「では！新人トレーナーになったみんなにポケモンを
プレゼントします！

そこにある5つの
モンスターボールを、
一人ひとつずつ選んでね！！」

「じゃあまずは順番を
決めようか。ジャンケンで
良いよね？」

みんなに提案すると
全員から了解を得たようだ。

そして、
ジャンケンの結果がこちら

ジャイアン↓のび太↓しずか
↓ドラえもん↓スネ夫

まずは、一番のジャイアンが
ボールを手に取った。

「出て来い！！
俺様のパートナー！！！！」

ジャイアンはボールを
高く放り投げる。

ポンッ　という効果音から
飛び出したのは――

『ポカァ〜？』

――ポカブのようだ。
「やりぃっ！
ポカブじゃねーか！！
こいつは強くなりそうだぜ！！」
しかし……
そんなに喜ぶジャイアンとは
裏腹に、必死に笑いを
堪えている４人の姿があった。
ついに我慢が出来なくなった
スネ夫が、
言ってはならないことを
言ってしまうようだ。

「ぶひゃひゃひゃひゃっｗｗｗ進化したらブタゴリラが
二匹になっちゃうよｗｗｗ
ひゃひゃひゃひゃｗｗｗ」

そして、ジャイアンの中の
切れてはいけない線が
プッツンと切れてしまった。

「スぅネぇ夫ぉ〜…
どうやらせっかくポケモンの
世界に来たってんのに
いきなり死にてぇようだなぁ！！！！！！！！！！」

スネ夫の目の前には
先程のように鼻息を荒くし、

指をポキポキ鳴らす
鬼同然のジャイアンの姿が。

「ひっ、ひぃぃぃぃっ！！
まま、まっママぁぁぁ！！！！」

しばらくお待ち下さいm（＿＿）m

～5分後～

そこには汚いボロ雑巾と、
やっと怒りを静めた鬼と、
鬼に恐怖する3人の姿が。

そして3人は思った。
―ジャイアンの前では思ったことを言ってはいけない―と。

舞台は移り変わり、
のび太がボールを選ぶ番に
なったようだ。

「おいで！　僕のポケモン！！」
のび太が投げたボールから
出てきたポケモンは――

『タジャ、タージャ！』

――ツタージャだった

「うわぁ！ツタージャだ！
よろしくね、ツタージャ！」

挨拶を込めて右手を差し出したのび太。

しかし…

『タジャァッ！』　―パァンッ

今起こったことを説明すると、
ひ弱そうなのび太が
気に入らなかったツタージャが
のび太の右手を
“つるのムチ”で叩いたのだ。
「そ、そんなぁ～…。」

あからさまに嫌われて、
ショックを受けるのび太。
どうやら仲良くなるのは
もっと先のようだ。

次に3番目のしずかが
ボールを選ぶ番になった。

「出てきて！私のパートナー！」
しずかが選んで、投げた

ボールからは――――

『ミ～ジュ、ミジュマ！！』

――――ミジュマルが出て来た。

「とっても可愛いわ！

これから頑張りましょうね？

ミジュマル！」

『ミィジュ～！』

自分のトレーナーが

可愛い女の子だと確認した

ミジュマルはしずかの

胸に飛び込んだ。

４番目に選ぶのは

我らがネコ型ロボットの

ドラえもんだ。

「よし、これにしよう。

さぁ　出て来い！！

ボクのポケモン！！」

放り投げられたボールが

二つに割れ、出て来たのは――

『チョロチョロ～』

――チョロネコだった。

これを見たドラえもんは……

「か、かかかっ、可愛いっ！！！！」どうやらポケモンである
チョロネコに一目惚れ
してしまったようだ。

「はじっはは、はじめまして！！
キミのトレー…
いや、彼氏のドラえもんです！
2人の愛の力でリーグ制覇を
目指しましょう！！」

『チョロ？チョロロ～』
「ええっ！？
『面白い方ですね』だって！？
いやぁ～それ程でも～」

少し会話しただけでも
ドラえもんはデレデレだった。
しかも、ネコであれば
ポケモンであっても言葉が
分かるようだ。

そんな様子のドラえもんを
見て、ブタゴリラにズタボロにされて気絶しているキツネを
除いた3人はドン引きである。

そして最後は哀れな

アホキツネこと、スネ夫だ。だが、まだ彼は
気を失っている様子だが…

「スネ夫！！さっさと起きろ！！
お前のせいで冒険が
始まらねぇじゃねぇかっ！！！！」

ボカッ

「ふぎゃんっ！」

奇声と共に目を覚ましたスネ夫そしてスネ夫は
ボールを選んで放り投げた。

中から出てきたのは――

『ミネ？　ズミズミ～。』

――ミネズミだった。

「ひぎゃぁあ〝ぁあ〝ぁっ！！
ねねねっ、ネズミィィィッ！！！！」
大のネズミ嫌いのドラえもんが暴れ出したのだ。
完全に気が動転して
ものすごい勢いで天井まで
走っているのである。

そんな中スネ夫は…

（うわちゃ～、ミネズミかぁ。

でもちゃんと育てれば
“いかりのまえば”や
“あやしいひかり”とか
便利な技も覚えるし、
なにもできないって訳じゃ
無いだろうし、コレはコレで
行けるな。　よし！）

と、今後の事を考えていた。

「スネ夫っ！！早くその
忌々しいネズミをボールへ
戻せっ！！！さもないと
“地球破壊爆弾”を……！！！」

「ドラちゃん、落ち着いて！
そんなものを使ったら
私たちも終わっちゃうわよ！？」
「そうだよ！もっと冷静になれよ！」

しずかとのび太が必死で
説得をするが、それでも
ドラえもんは落ち着こうとしない

「全く！　失礼な奴だなぁ。
ミネズミ、これから頼むよ？」
『ズミッ！』

そう会話したあとに

スネ夫はミネズミをボールへと戻した。
こうして5人にポケモンが
行き渡った。

そして、アララギ博士の
話が始まろうとしていた
その時だった。

――――フッ
と、辺りが急に暗くなった。
研究所の中は、
電気がついていたので
真っ暗にはならなかったが、
それでも驚くのは
充分だった。

「なんだなんだ！？
もう夜が来たってぇのかよ！？」

「そんな！？　ついさっきまで…」
「うわぁぁん！！　ママぁぁぁ！！！！
怖いよぉ～！！」

「一体どうなっちゃうのかしら？」

「みんな、落ち着いて！
しばらくジッとしていよう。」

と、ドラえもんがみんなを
まとめたすぐあとに、
また光が戻ったのだ。

「アララ〜…　。
一体何だったのかしら？
でもみんな大丈夫そうだから
話を続けるわね？

さて、新人トレーナーの
みんなに頼みたいことが
あります。
それは、この［ポケモン図鑑］を完成させることです！！

図鑑にはポケモンの
能力や技を調べる機能も
あるから、活用してね！

それじゃ、みんなに
［ポケモン図鑑］と空の
モンスターボールを配るわね。」

アララギ博士の手から
５人に［ポケモン図鑑］と
空のモンスターボールが
行き渡った。

「ポケモンを見つける目的で
あれば、ジム戦に挑戦しても

構わないわ。
とにかくたくさんのポケモンを見つけて、ゲットしてね！！」

『はいっ！』

全員からの元気な返事が
研究所に響き渡った。

「うん！　いい返事ね！！
ついでに［ライブキャスター］も
渡しておくわ。
私の番号も入ってるから
何かあったら連絡してね。

じゃあね！みんな旅を
楽しんでね♪」

こうしてのび太たちは
１番道路へと走って行った。

これからのび太達の
本当の冒険が始まるのである。

第2話―5人のパートナー選び―（後書き）

どうでしたか？

感想・評価お待ちしています！！

第3話―ツタージャ　ピンチ！！―（前書き）

お待たせしました。
第3話です。

それでは、お楽しみ下さい。

第3話―ツタージャ　ピンチ！！―

「じゃあ俺とスネ夫は
先に行くぜ。今度あったら
バトルでギタギタにしてやる！」

「うん、今度はバトルしよう！」

ジャイアン・スネ夫に
別れの挨拶をした、のび太。

ジャイアン・スネ夫は
先にストーリーを進める
つもりのようだ。

残りの3人の
のび太・しずか・ドラえもんはある程度までレベルを
上げてから進むつもりらしい。

「それじゃあ、ボクらも
レベル上げを始めようか。
どれくらいで合流する？」

「そうねぇ…。
一時間後位で良いかしら？」

「僕はそれで良いよ。

ドラえもんは？」

「分かった。　じゃあ一時間後にここに集合しよう！！」

どうやら一時間後に
1番道路の入口に集合
する事になったようだ。

そして、3人はそれぞれの
場所へ去っていった。

それでは1人1人の様子を
見て行くことにしよう。

しずか視点――――

「行くのよ！ミジュマル！」

『ミジュミッジュウ！』

今からバトルが始まるようだ。
相手は野生のヨーテリーだ。

「まずはこうげきよ！
ミジュマル“たいあたり”！」

ダッ――――
と、地面を走るミジュマル。

そして体全体を使った攻撃が
野生のヨーテリーへと
直撃した。

『キャウンッ！？
……テリィィッ！！』

吹っ飛ばされはしたものの、
立ち上がるヨーテリー。
今度はこちらの反撃かと
言うように吠えて、
“たいあたり”を仕掛ける。

（あのヨーテリーは
かなり素早いわ！恐らく
ミジュマルじゃかわせない！
だったら――――）

冷静に相手の能力を
分析するしずか。
そしてミジュマルへと
指示を出す。

「“なきごえ”よ！
少しでもダメージを減らして！」
『ミ～ジュ～♪
――――ジュマァッ！！』

相手の攻撃を下げる技
“なきごえ”を使ったあとに
”たいあたり”で吹っ飛んだ
ミジュマル。
しかし、ヨーテリーと
比べるとダメージは少ない。

「コレで決めるわ！！
ミジュマル“みずでっぽう”
よ！」

『ミ～～ジュマァァァッ！！』

少し水を溜める動作を
したあとに、ヨーテリーへ
水を吹き出したミジュマル。

『テリィィィィッ！！』

“みずでっぽう”は、
真っ直ぐにヨーテリーへ
飛んでいき、直撃した。

もうヨーテリーは足元は

フラフラで恐らく
ひんし寸前であろう。

（あの子の素早さは
きっと武器になるわ！！）

「捕まって！それっ！！」

ひんし寸前のヨーテリーへ
向かって飛んでいく空の
モンスターボール。
それはヨーテリーに当たり
中へと収納した。

一回――

二回――――

三回――――――

最後にカチッという
音が鳴り、ボールの揺れが
止まった。それはすなわち、
ヨーテリーをゲットした事を
示しているのだった。

「やったわ！！
ヨーテリーをゲットしたわ！」

『ミジュミジュゥ！！』

地面に落ちているボールを
拾い上げ、それを天に掲げて
そう叫んだ。

彼女のパートナーのミジュマル
も祝福しているようだった。

こうしてしずかの
初ゲットは成功に終わった。

それではドラえもんの様子を
見てみることにしよう。

ドラえもん視点―――

「おるぁぁぁ！！
もっとかかってこいいいい！！！！」
現在ドラえもんは
先程のしずかと同じく
ヨーテリーと戦っている。

だがしずかと決定的に
違うことは、
ドラえもんがポケモンに
指示を出して戦って

いるのではなく、
ド・ラ・え・も・ん・が
空気砲を手にして
戦っていることだ。
何故こんな事になったかと
いうと、
少し時間を戻すことになる――

～３０分前～

「さぁチョロネコちゃん！
２人でキミのレベルを
上げましょう！！」

『チョロチョロ～。』

「ええっ！？
『頼りにしてるわ』だって？
よっしゃぁぁぁ！
頑張るぞぉぉぉぉ！！」

相変わらずメロメロ状態の
ドラえもん。
どうやらチョロネコの
『頼りにしてるわ』発言で
俄然やる気が出たようだ。

そこに一匹のヨーテリーが
現れた。

「あっ！ヨーテリーだ！
よぉし！チョロネコちゃん！
2人であいつを経験値に！！！」

『チョロッ！』

ドラえもんが指示を出す前に
“ひっかく”の準備をして
ヨーテリーへ突っ込んでいく
チョロネコ。

しかし…

『チョロォッ！！』

カウンター気味にヨーテリーの
“たいあたり”を受けた
チョロネコ。
まだ戦闘不能には
なっていないようだが、
チョロネコは苦しそうだ。

「貴様ぁぁぁぁぁぁぁ！！！
ボクの彼女になんて事を
してんだぁぁぁぁ！！」

このように叫んだあと、

四次元ポケットから
“空気砲”を取り出し、
ヨーテリーをメッタうちに
した。

先程のヨーテリーの
経験値の半分はチョロネコへ
行ったが、
もう半分はトレーナーである
ドラえもんが倒してしまった
為、どこかへ行ってしまった。

そしてドラえもんは決意した。

（チョロネコちゃんを
傷つける奴なんて許さない！こうなったらボクが
チョロネコちゃんの経験値を
稼いでやる！！）

決意を固めたドラえもんは
ヨーテリーの群れを発見し、
それに向けてチョロネコの
入ったボールを投げた。

『チョロチョ…チョロ！？』

ボールから出たチョロネコは
いきなりヨーテリーの群れへ
放り込まれた事に驚く。

一方ヨーテリー達は、
このチョロネコが群れに
危害を加えようとしていると
思い、今にもチョロネコに
襲いかかりそうだ。

そこでドラえもんは動いた。

「戻って！チョロネコちゃん！」
ヨーテリーの群れと
対峙したチョロネコを
ボールへと戻したドラえもん。
これでチョロネコは
“バトルに参加”した事になる
ここからはドラえもんの
仕事だった。
このヨーテリーの群れを
倒せば、その半分の経験値は
チョロネコへ向かう事になる。ドラえもんはもう一度
決意を固めるために叫んだ。

「さぁかかってこい！！！
このボクが相手だっ！！！」

そして、
“たいあたり”や“かみつく”を受けまくりながらも、
空気砲で応戦している
今に至るのである。

ドラえもんが全ての

ヨーテリーを倒すのは
まだ先のようだ。

続いてのび太を見てみよう。

のび太視点――――

のび太は現在、ツタージャを
ボールから出して
散歩をしていた。
こうしていれば、
アニメのサトシのように
ポケモンと仲良くなれると
考えたからだ。

しかしツタージャは
のび太に着いてこられるのが
鬱陶しいのか、
短い足を必死で動かして
のび太から離れようとしている。

「待ってよ、ツタージャ！」
仲良くしよーよ！！」

追い付いたのび太が
ツタージャを抱きかかえる。

『タジャッ！！』

「えっ？――ぶへぇっ！！！」

それが本当に嫌だった
ツタージャはまず
“つるのムチ”でのび太の
顔面をひっぱたき、
のび太の腕から脱出した。

そのあとはしっぽを使い、
葉っぱの嵐のようなものを
展開した。
“グラスミキサー”だ。

しかし、馬鹿なのび太は…

「すごいや、ツタージャ！
もう“リーフストーム”を
覚えたんだね！！」

“グラスミキサー”を
“リーフストーム”と
勘違いしているようである。
確かに見た目は似ているが、
威力では倍以上の差がある。

のび太は“リーフストーム”を
覚えたことに喜んだ。

それが自分にぶつけるために
作られたとも知らずに。

『ターーー…ジャァァッ！！』

「ええっ！？ちょっと待ってよ
ツタージャ！」

ドカァァァン！！

「うわぁぁぁぁっ！！！！？」

ツタージャが作り出した
“グラスミキサー”は
のび太に直撃した。

更に不運なことに、
ぶっ飛ばされた先は――

バッシャーーン！！

「冷たいっ！！」

――川だったのだ。
川に落ちたのび太を
呆れたように見て、
ツタージャはどこかへと

去っていってしまった。

「あっ！　ちょって待ってよっ！
ツタージャァ！！」

のび太の叫び声も虚しく、
ツタージャは草村の中に
隠れて行ってしまった。

「はぁ…。どうしよう…？」

のび太は焦っていた。
アニメでのツタージャは
自分とトレーナーが
釣り合わないと判断した場合
そのトレーナーの元から
逃げ出してしまうのだ。

自分も捨てられてしまう
と、考えたのび太は、
不安で仕方ないようだ。

ここでツタージャの様子を
見てみよう。

ツタージャ視点――――

ツタージャは現在
イライラしながら草村に
身を潜めていた。

なぜなら自分の
トレーナーがあんなの（のび太）
だからだ。

ひ弱でポケモンの知識もない。
そんなトレーナーだから
逃げ出そうとしていた。しかし、
そんなイライラが
不注意に繋がった。

『ズミーッ！ミネ、ズミーッ！』
なんと縄張りの
見張りをしていたミネズミに
見つかってしまったのだ。
すると、あれよあれよと
言う間にミネズミや
ミルホッグが続々と
集まってきたのだ。
説明をしても聞いてくれそうに無い様子だ。

『……ジャッ！』

軽く舌打ちをしつつも、
ツタージャは
臨戦態勢を取った。

再び、のび太視点―――

のび太は驚いていた。
なにせ、自分のツタージャが
ミネズミとミルホッグの
群れに囲まれていたからだ。

「ツタージャ！！　大丈夫かい！？
今助けを呼んでくるからね！」

そう言ってのび太は
駆けだしていった…。

～１０分後～

必死に走りつづけ、
ついにのび太は
しずかとドラえもんを
発見した。

「お～～～い！！２人共ぉぉ！！」

「あら？のび太さんじゃない！
どうしたの、そんなに慌てて？」
「それにびしょ濡れだよ？」

慌てている事と、
びしょ濡れな事を
気にしている２人。

「大変なんだっ！！
僕のツタージャが…！！！！」

言葉を切ったあとに
のび太は今起きている
状況を説明した。

「なんだってぇ！！？
ミルホッグがぁ！！？
でもゲームじゃ、この辺で
ミルホッグなんて
出てくることはないよ！？」

「でもいたんだよっ！！
早くしないとツタージャが…」

「ドラちゃん、
話すのは後にしましょう。
今はのび太さんの
ツタージャを助けることが

先決だわ！！」

「分かった。のび太君、
案内を頼むよ。」

「うん！こっちだよ！」

のび太達は話を
後回しにして、ツタージャの
居る場所へと走り出した。

第3話―ツタージャ　ピンチ！！―（後書き）

この作品でのバトルは
ゲームのように、１ターンずつの技の応酬ではなく、
アニメのように、
自由に動ける設定にしてます。

第４話―トレーナーの条件―（前書き）

不注意で、
ミネズミ、ミルホッグの
縄張りに入ってしまった
のび太のツタージャ。
一体どうなる？？

第４話―トレーナーの条件―

のび太・しずか・ドラえもんの三人がツタージャの所へ
たどり着いた時には
すでにボロボロで、
息があがっているツタージャと
戦闘不能になった数体の
ミネズミとミルホッグだった。
まだ動けるミネズミと
ミルホッグは軽く見積もっても２０匹は超えている。

まさにツタージャは
絶体絶命だった。

「のび太君！！あんなに
囲まれた状況じゃ不利だ！
一度ツタージャをボールに！！」

「分かった！！
戻れ、ツタージャ！！」

ドラえもんの提案を
素直に聞き入れ、ツタージャのボールを取り出すのび太。
そしてツタージャに向けた
ボールから赤い光線を放った。
通常ならば、ボールから
放たれた赤い光線にポケモンを当てればボールに戻す事が出来る。

しかし――――

バチィッ！！

「そんな！！？戻せない！！！！」

確かにツタージャに赤い光線は当たった。

それでもツタージャを

ボールに戻す事は出来なかった。

（おかしいわ…。

ボールに戻せないって事は、

“しめつける”や

“まきつく”の効果？

でもそんな形跡は無いわ…。

後は……！！！）

冷静に状況を判断するしずか。

そして結論が浮かんだ。

「のび太さん！！

恐らくだけど、ツタージャは

“くろいまなざし”を

受けているのよ！！」

「“くろいまなざし”！！？
どういう技なの！？」

知識がないのび太は
しずかに質問する。

「相手の交代を封じる技よ！！
つまりツタージャを
ボールに戻す事は出来ないわ！」

「そんなぁ！？」

更に悪い状況だと知り
のび太は、愕然とする。

「どうすれば“くろいまなざし”は、解けるの！？」

「“くろいまなざし”を
かけたポケモンを倒す事だよ！
しずかちゃん、行くよ！！」

のび太の質問に、
ドラえもんが答える。

ドラえもんはどうやら
しずかと共に
全てのミネズミとミルホッグを蹴散らすつもりのようだ。

「分かったわ！のび太さん、
ツタージャは必ず
私とドラちゃんが助けるわ！！」

のび太にツタージャを
助けると約束したしずか。
そしてバトルが始まった。

「行くんだ！チョロネコちゃん！」

「頑張って！ミジュマル！！
ヨーテリー！！」

ドラえもんはチョロネコを、
しずかはミジュマルと
五匹のヨーテリーを繰り出した。

ドラえもんのチョロネコは
ドラえもんが必死で
倒したヨーテリーの群れの
経験値があるため、
かなりレベルが上がっている
ようだった。

一方しずかも、
ミジュマルと最初に捕まえた

ヨーテリーはレベルを
上げた様子だ。
そしてツタージャを
助けるための戦いが始まった。

のび太視点―――

のび太は悔やんでいた。

自分のポケモンなのに…！
自分のツタージャなのに…！！
自分のパートナーなのに…！！！
それなのに、今は
他人に頼る以外手段がない。

そんな自分を悔やんでいた。

「何も出来ない訳じゃない…！！
僕でも出来ることを探すんだ！」

のび太はそう決心して
ツタージャの方に
視線を移した。

（僕があの場に行けなくも
ツタージャに指示を
出すことは出来る！！）

「ツタージャ、“つるのムチ”
を使って前にいる3体の
ミルホッグをなぎ払うんだ！！」

『……』

しかしツタージャは
のび太の指示を聞かなかった。
その命令を無視して
“たいあたり”で突っ込んだ。
それは一体のミルホッグに
クリーンヒットしたが、
倒すまでには至らなかった。

そしてミルホッグが反撃し、
ツタージャに“たたきつける”が襲いかかったが、
ギリギリの所で回避した。

だがもう2体のミルホッグも

同じように“たたきつける”で襲いかかってきた。
その内の1体はかわすことが
出来たが、もう1体の
“たたきつける”を
かわすことが出来なかった。

『タジャッ！！！』

「ああっ！！！ツタージャ！！！」

『タ……ジャァ……！！』
ツタージャはまだ
立ち上がった。

ツタージャは、ふと思った。

ひょっとするとのび太の
あの指示は正しかった
かもしれない――と。

確かに“たいあたり”の
方が、威力は高い。

だからツタージャは
せめて1体でもミルホッグを
仕留めようと考えて
“たいあたり”を選択した。

だが、前方に複数の敵が
居る場合は、“つるのムチ”でなぎ払っても正解だった
かもしれない。

そうすれば、確実に倒す事は
出来なくても、相手を
ひるませて反撃をさせない
事も出来たのかもしれない。

そんな時――――

「これで終わりだ！！
チョロネコちゃん、
“ひっかく”！！」

「頑張って！
ミジュマル“みずでっぽう”、
ヨーテリーは“かみつく”！！」

『チョロォォォッ！！！』

『ジュマァァァッ！！！』

『テリィィィッ！！！』

ドシャァァンッ！！！

――しずかと、
ドラえもんのポケモン達が
今ツタージャの目の前にいる
３体のミルホッグ以外を
なぎ倒してきた。

しかし
ドラえもんのチョロネコは
もうボロボロ。
空気砲で戦っていた
ドラえもん自身も傷だらけだ。

しずかも、
４体のヨーテリーが
戦闘不能に陥って
残ったミジュマルと
ヨーテリーもかなり
ダメージを負っていた。

「はぁ、はぁ、はぁ、
お待たせ、のび太君！
あとは、そいつ等だけだよ！！」

「ドラえもん……。
そんなに傷だらけなのに……」
傷だらけのドラえもんを見て
今にも泣きそうなのび太。

そんな中で……

バチィ！

「「「？」」」

何か火花が発生したような
音が鳴った。

最初はのび太達も
聞き間違いだと考えた。

だが――――

バチバチィッ！！

――――今度は確かに聞こえた。

全員が音の鳴る方へ
振り返ってみると、

「ッ！！！？」

のび太は言葉を詰まらせた。

それもそのはず、
３体いる内の１体の
ミルホッグがツタージャの
方を向いて、電気を貯めている。

「不味い！！
何か電気技が来るよ！！！！」

ドラえもんが叫んだが、
時もうすでに遅し。

『ミルホォォォッグ！！』

そして電撃は放たれた。
その技は“１０まんボルト”
だった。

「ツタージャーーーーッ！！！！」

のび太は自分の相棒の名を
叫びながら走り出した。

ツタージャは今、戦闘不能寸前だ。
そんな体でタイプ相性が
良いとはいえ、元から
威力のある“１０まんボルト”があそこまでフルパワーで
貯められていたら
ひとたまりも無いだろう。

最悪の場合、
死に至るケースもあるだろう。
ツタージャをそんな事にだけは
したくないのび太は
考える前に走り出していた。

ツタージャも
死を覚悟していたが――――

バリバリバリィッ！！！

「うぐぁぁぁぁぁあっ！！！」

『タジャッ！！？』

『ミルッ！！！？』

――――電撃を受けたのは
ツタージャではなかった。

自分が受ける筈だった
電撃を受けなかった
ツタージャも驚いていたし、
何より電撃を放った
ミルホッグが一番驚いていた。

「う……。
大丈夫？ツタージャ。
こんな事くらいしか
出来ないけど…げほげほっ…
こんなトレーナーでごめんね。
僕に怒っていたのは
“グラスミキサー”と
“リーフストーム”を
間違えたからだろう？」

『ジャ…！！？』

ツタージャは驚いた。

のび太が一生分からないと
思っていたからだ。

今回のび太が
ツタージャの発見を
遅れたのは、川に落ちた後に
図鑑を使ってツタージャの
技を調べていたからだった。
そこで、ツタージャが
現在覚えている技を
知ったのだろう。

「ホントに……ホントに
ごめんね。」

この言葉を最後に
のび太は気を失った。

「のび太君ッ！！！」

「今助けるわ！！！」

しずかとドラえもんが
助けに入ろうとするが、

『ミルッ！！』
『ミルホォッ！！』

２体のミルホッグに
道を阻まれてしまう。

このまま終わってしまうと
思われたが、
このままでは終わらなかった。

『タジャーーーーー！！！！！』

突然、ツタージャが
雄叫びを上げた。

体からは緑色の
オーラがほとばしっている。

「あれは…！！？」

「“しんりょく”だ！！
ツタージャの特性、
“しんりょく”が
発動したんだよ！！」

やや興奮気味にしずかに

解説するドラえもん。

そしてツタージャは
葉っぱの竜巻、
“グラスミキサー”を
作り出した。
だが、ただの“グラスミキサー”とはサイズがケタ違いだった。

『ミルホッ！！？ミルゥゥ…』

“グラスミキサー”の
サイズに驚いたミルホッグは
ここでトドメをささなければ、ヤバいと判断し、
もう一度“１０まんボルト”の
電気を貯め始めた。

しかし――――

『ターー！…ジャァァァァッ！！』

『ミッミルホォォォォ！！？』

――――ミルホッグの
“１０まんボルト”より、
ツタージャの

“グラスミキサー”の方が、
圧倒的に早かった。

そして特大“グラスミキサー”を食らったミルホッグは
某悪の組織の3人組のように
飛んでいき、星となった。

『ミルッ！！？』
『ミルホォオオッグッ！！』

ドラえもんとしずかの
進路を妨害していた
2体のミルホッグも
飛んで行ったミルホッグを
追いかけて去って行った。

「のび太（君／さん）！！！」

ミルホッグがいなくなり
のび太の元へ駆け寄る2人。

ドラえもんが少し
揺さぶるとのび太は目覚めた。

「う～～ん……はっ！！
ドラえもんっ！！ツタージャ！！

僕のツタージャは！！？」

「大丈夫、無事だよ。」

ドラえもんは―ほら―
と、言って
ツタージャを指差した。

そこには
お前に心配されなくても
大丈夫だ―――と、
いいたげな表情の
ツタージャが立っていた。

とはいえ、ツタージャも
少しはのび太の事を
認め始めていた。

混戦で正しい判断を出来る事

間違いをさがして
正解を探す努力する事

この２つに、だ。

「のび太さん、ツタージャに
感謝しなきゃね。

のび太さんが倒れた後に
ツタージャがのび太さんを
助けてくれたのよ。」

「そっかぁ…ありがとう、
ツタージャ。それと、
本当にごめんね。
それじゃ、ボールに
戻って休んでて。」
そう言って、ツタージャの
ボールを取り出して、
ツタージャをボールへと
戻した。

「じゃあみんな！
カラクサタウンに向けて
出発しようか！！」

のび太は2人に提案すると、

「それはいいけど、
のび太君大丈夫なの？」

心配すれドラえもんの
声が返ってきた。

「もう平気さ！
いつもジャイアンにもっと
ひどい目にあわされてる

からね！！」

そのドラえもんに自分は
大丈夫とアピールする

「それもそうよね。
じゃあ、出発しましょうか！」

「うん！」　「うん！」

のび太が大丈夫と確認した
しずかは、２人に
出発するように促し、
２人からは元気な返事が
返って来た。

こうして３人は再び
カラクサタウンに向けて
歩き出した。

今日はのび太と、
ツタージャの仲が少しだけ
縮まった日だった。

第４話―トレーナーの条件―（後書き）

しずかのヨーテリー×５の内
最初に捕まえたヨーテリーは
“やるき”であとの４匹は
“ものひろい”要因です。

ですから、しずかは
１匹のヨーテリーしか
育てるつもりはありません。

第５話―対決・のび太ＶＳＮ！―（前書き）

ミルホッグ事件から一夜明け、
のび太達３人は
カラクサタウンのポケモンセンターに宿泊していた。

第５話―対決・のび太ＶＳＮ！―

現在の時刻は、ＡＭ９：００。

「ふぁ～あ、よく寝たぁ。」

のび太が目を覚ました。

昨日のミルホッグ事件の
疲れが溜まっていたようで、
かなりの時間を寝ていた。

「何だか外が騒がしいな…？」

ベッドから抜け出し、
カーテンを開けるのび太。

思わず目を突き刺すような
眩しさに、一度目を瞑って
しまうが、やがて
目が慣れてくると、
人混みを発見した。

よく見ると、

見覚えのある人物も、
人混みに混ざっていた。

オレンジの服を着た
大柄な少年――ジャイアンと

どこから見ても変わらない、
不思議なリーゼントのような
髪型の少年――スネ夫

この2人の姿が見えた。

更に、もっと目を凝らせば、
全身が水色のダルマや、
タヌキに見えるロボットの
ドラえもん、
その横に立つ
可憐な少女のしずかも
確認することが出来た。

「みんないったい何をしに
行ってるんだろう？」

そんな疑問と共に
のび太は普段着に着替え、
ポケモンセンターの外へ
飛び出して行った。

「おーーい！！皆ぁぁ！！」
のび太は顔見知りの４人に
声をかけた。

「お、のび太じゃんかよ。」
それにジャイアンが
いち早く気づく。

「やぁ、のび太。
昨日は大変だったそうだね。」
スネ夫がのび太に話を
昨日の話を持ち掛けてきた。

その口振りから察するに、
ドラえもんとしずかが
ジャイアンとスネ夫に
昨日の事件について
話したようだ。

「そうだったんだよ～。
ホントに死ぬかと思ったよ。」
昨日の出来事の感想を

述べるのび太。

「ねぇ、ジャイアン、スネ夫。
昨日君達の方でも何か
ゲームにないような事は
あったかい？」

「ぼくたちの方は異常なかったよ。ね、ジャイアン？」

「おう、コレといって
変なことは無かったぜ。」

「そうか……。」

どうやらドラえもんは
昨日起こった異常事態が
まだ気になるようだ。

ジャイアン、スネ夫の方も
何か起こっていないかと
聞いても何もないようで、
少しは安心したようだった。

「ところで、この人混みは
いったい何なの？」

のび太がポケモンセンターを

出る前に持った疑問を
４人にぶつけた。
「ほら、のび太さん。
覚えてる？
ゲームのイベントよ。
カラクサタウンについたら
プラズマ団のゲーチスの
演説があったでしょ？
あれがついさっき終わったの。
それで、人混みの中に
タケシさんとスネ夫さんを
見つけたからお話してたの。」

今までの状況を詳しく
説明するしずか。

するとのび太は
あることに気がついた。

「じゃあ、この辺にＮが
いるんじゃないのかな？」

「たしかに……。
ゲームならそのまま流れで
バトルになっちゃうよね。」

のび太の発言にドラえもんは
考えていた。

（ひょっとしたらNとの
戦いでも何か想定外の事が
起こるのかも知れない…。
このまま下手にイベントを
起こすより、すぐにここから
次の目的地に行く方が…。）

ドラえもんが頭を
抱えて悩んでいた所に、
ヤツはやってきた。

「アッ！　Nだ！！」

のび太は、
帽子をかぶっていて、
緑の髪を背中まで伸ばし、
腰にルービックキューブの
ような物をつけている青年

———Nを指差し、叫んだ。

「こンの馬鹿ァっ！！！」

ボカッ！！

頭を抱えていたドラえもんは
Nの方を見てギョッとした
顔をしてから、
ドラえもん特有の丸い手で
のび太の頭をぶん殴った。

（ボクがどうやったら無事に
何事もないように過ごそうと
していたのに、
君って奴はどうして
そこまで馬鹿なんだ！？
空気が読めないんだ！？
そんなんだからいつも
テストは0点しか
取れないんだこの大馬鹿が！！！）
（そこまで言わなくても～。）

ドラえもんがのび太を
殴ったあとに、2人は
ヒソヒソと話を始めた。

その様子を見て
しずか・スネ夫・ジャイアン
も、話に参加して来た。

（でもよぉ、見つかっちまった
モンはしょうがないと
思うぜ？）

（タケシさんの言うとおりよ、
ここはもう戦いましょう。）

（じゃあ誰がNと戦うの？
ぼくがやろうか？）

（無論ここはのび太君に
責任をとってもらうよ！！）

（えぇ～！？僕がやるのぉ！？）

（当たり前だっ！！
君が叫ばなきゃこんな事に
ならなかったんだぞ！！）

（ちぇ、分かったよぉ！）

5人が誰がNと戦うかを
ヒソヒソ会議していると、
すぐそこまでNが来ていた。

「君達、ボクの名前を
叫んでおいてなにヒソヒソと
話をしているのかな？」

「いえっ！何でもないですよ！！
ただ、僕達の間では
Nさんがちょっとした
有名人なんですよぉ！」

明らかにNに怪しい目で
見られているのび太。

のび太は必死で言い訳を
考えるが、完全に焦っている。

（怪しいな、この子達。
ちょっと調べて見るか。）

どうやらNはのび太を
ハメる作戦を考えたようだ。

「ボクのどういう所が
有名なのかな？」

Nはのび太に質問した。

「そりゃぁモチロン、
ポケモンとトモダチになって
ポケモンを解放するっていう
素晴らしい理想を持っている
プラズマ団の王っていう
所ですよぉ～～。」

『……』

長い沈黙が流れた…。

『アホかお前はァァァァ！！』

スネ夫とジャイアンの
ダブルツッコミが入った。

しずかは頭を抱えており、
ドラえもんに至っては
地面に両手と、両膝をつき、
「もう終わった…」と
つぶやいている。

「え、何が……あぁっ！！」

どうやらのび太も
気がついたようだ。

――――誰も知らないはずの
Nの個人情報について
話していたことに。

「怪しいとおもってはいたが、

どうしてそんな事まで
知っているんだい？
悪いけど叩き潰させて
貰うよ！！」

顔付きを変えたNは
モンスターボールを構えた。

「そんな！？
あなたは自分の事情で
ポケモンを使うなんて事は
しなかったんじゃ…！？」

「そんな事まで知っているのか、
君は……！！
ボクはポケモンを
使うんじゃない！！
トモダチの力を借りるだけさ！」

その会話を最後に、Nは
モンスターボールを
放り投げた。

中から出てきたのは、
真っ黒な体に、
長い髪のようなものを
持ったポケモン———

『グルルルルッ……。』

――ゾロアークだった。

「さぁ、君も早く
ポケモンを出すんだ！！」

さっきまでとは明らかに
顔付きも雰囲気も違うＮ

「……っ！！　ツタージャ！！」

のび太もかくごを決め、自分のパートナーである
ツタージャを場に送り込んだ。

「君達からでいいよ。
トモダチの力を借りたボクが
負ける訳なんて無い！！」

「そうかい……
ツタージャ！！“つるのムチ”！」

のび太の指示を聞き、
ツタージャは首元から
つるを――

『タジャァッ！！』

「えぇ！？
ちょっ、ツタージャ！！？」

――出さずに
ゾロアークへと
突っ込んでいった。
“たいあたり”であろう。

「トレーナーの言うことも
聞けないポケモンなのか…
それともトレーナーが
力量不足なのかな！？
ゾロアーク、
“シャドークロー”で弾け！！」

『ガルァッ！』

ばちっ！！

『タジャ！』

ツタージャの渾身の
“たいあたり”は、
ゾロアークの黒い爪の技――
“シャドークロー”で
呆気なく弾かれた。
それでもツタージャは
まだ余裕そうだった。

「分かったよ。
君がそうしたいならすればいいよ。
ツタージャ“たいあたり”！」

『タジャー！！』

のび太は指示を変えて、
“たいあたり”を指示したが
今度は“つるのムチ”で
攻撃を仕掛けた。

「やはり、言うことを聞かないか……。
ゾロアーク、つるをつかめ！！」
『ゾルァッ』

『ツタジャッ！？』

迫ってきたつるを
ゾロアークはばしっと掴み、

「そのままツタージャを
振り回せっ！！」

つるをぶんぶんと振り回し、
ツタージャが目を回してきたのを確認すると、
次なる指示を出した。

「地面に叩きつけるんだ！！」

『ゾロ、アークッ！』

『ダジャー！！』

ドガッと地面をバウンドして
ようやくツタージャは
ゾロアークから解放された。

それでもツタージャは
立ち上がったが、
息も絶え絶えだ。

「接近しながら“つめとぎ”を
使え！！
そこから“つじぎり”だ！！」

ダッと、ゾロアークは
その場から駆け出して、
鋭い爪を更に鋭くといで、
攻撃と命中を上げた。
その更に鋭くなった爪が
今にもツタージャに
襲いかかろうとしていると——

「頑張れツタージャ！！
“グラスミキサー”で

迎え撃つんだ！！」

――横から、のび太の
指示が割り込んできた。

しかし、当然と言っても
おかしくはないが、
ツタージャはのび太の指示を
聞かずに、“つじぎり”を
避けようと、走り出した。

だが、“つめとぎ”で
命中の上がったゾロアークは
一瞬でツタージャに追いつき
“つじぎり”をブチかました。

『タジャァァァッ！！』

「ツタージャっ！！」

ゾロアークにハネられた
ツタージャが地面に落ちた。

のび太が抱き抱えようと
すると、そののび太の腕を
弾いて、また起き上がった。

「根性だけはあるみたいだね。
でも、今度こそ決めるよ…！！

“かえんほうしゃ”っ！！」

Nの指示を聞き取った
ゾロアークは口の中に
炎を溜め込んだ。

そして、それをゴウ！！という
効果音と共にツタージャへ
向けて、吐き出した。

ツタージャに相性のいい
炎の攻撃だ。

「ツタージャっ！！
僕の言うことを聞いてくれ！
かわすんだ！！」

そんなのび太の叫びも
虚しく、ツタージャは
“グラスミキサー”で
相殺しようと、葉っぱの嵐を
作り上げた。

『タァァ、ジャァァァァ！！』

『ガァァァアッ！！』

2匹が作り出した技は

丁度中央でぶつかった。
だが、ぶつかったのは
一瞬で、炎は葉っぱの嵐を
燃やし尽くした。

そのまま勢いを衰える事なく
ゾロアークが生み出した炎は
ツタージャに向かっていき
ツタージャをも、
燃やし尽くしたのだった。

「……ツタージャ、
戦闘不能だね。」

ボロボロだった上に、
弱点の攻撃を受けたツタージャが起きあがることは無かった。

のび太は気絶したツタージャを
ごめんね、とだけ言って
ボールへと戻した。

それに続いて、Nも
ゾロアークをボールに戻した。

「ボクはあそこまで
トレーナーの指示を聞かない
ポケモンを腐る程見てきた。」

その言葉にのび太は、
ピクリと反応したが
それでも顔を下げたままだった

「やはり、このバトルで
確信したよ。ポケモンは
人間の手から解放されるべき
なんだ！！
君のような未熟者がトレーナーだったばかりに、
ツタージャはボクのトモダチに
キズ一つ付けることなく
敗れた。
まぁ、あのツタージャは
元から強くは無かったけどね。」

自分の悪口を言われるのに
馴れているのび太は、
自分の悪口はスルーできた。

だが自分のパートナーの
悪口は我慢できずに、
Nをキッと睨んだ。

「コレだけは言わせてもらう。
君はトレーナーの才能が無い。
トレーナーなんて
今すぐに辞めて欲しい位だ。
もし、まだ僕に勝つ気が
あるのならば、

あんな弱いツタージャは
解放してもっと強いポケモンを
手に入れることだね。」

この言葉を聞いて、
我慢が聞かなくなった
のび太はNに飛びかかろうと
したが――――

「待て、のび太。」

――――ずっとのび太の
バトルを見守っていた4人の
内の1人、ジャイアンに
前に立って止められた。

「ジャイアン……。」

「おめぇの気持ちは分かる。
だから、ちょっと待ってろ。」

そのことばはのび太にとって
ありがたかった。

涙が出そうになったのび太は
ぐっと堪えた。

それに、Ｎの言葉で
頭に血が上って、見えて
いなかったが、
気がつけば
４人全員と、その４人の
パートナーのポケモンが
のび太の前に立っていた。

人間（＋ロボット）もポケモンも
とても険しい表情をしている。

「なんだい？君たちもボクと
やるって言うのかい？
なんなら全員かかって――――

バギャッ！！

Ｎの言葉が詰まる、と
同時に骨が砕けたような
音が辺りに響いた。

それもそのはず。

ジャイアンの右ストレートが
Ｎの顔面にヒットしたのだから

「驚いたな。
まさかいきなり実力行使に
移ってくるとはね。
でも何で君が殴るんだい？」

「のび太とツタージャを
馬鹿にしたからに
決まってんだろうが！！」

「だから、確かにボクは
彼を馬鹿にしたが、
それでどうして君が
ボクを殴る理由になるんだい？」

「友達をコケにされて
腹がたたねぇ人間なんざ
いるわけねぇだろ！！」

ジャイアンは殴られた頬を
さすりながら話すNの
胸倉を掴んだ。

いつもならこういう時に
止めに入るしずかも、
ドラえもんも止めに入らない。
それだけ頭にキている

ということだろう。

足元に居る、４人の
ポケモン達も騒いでいる。

よっぽど、ツタージャを
馬鹿にされたことで
腹が立っているのだろう。

「俺はてめぇやプラズマ団が
許せねぇ！！」

『カブッ！！』

ジャイアンとポカブが
Ｎに詰め寄る。

「ポケモンを解放するっていう
理想自体がくだらない！！」

『ズミズミィッ！！』

スネ夫とミネズミがＮに
近寄る。

「だから今ここで宣言してやる！！」

『チョロォ…！』

ドラえもんとチョロネコが
一歩前へ出る。

「私たちが全力を以て
プラズマ団とその野望を――

『ミジュッ！！』

しずかとミジュマルが
キッとNを睨む。

『ブッ壊してやる（わ）！！！！』

ジャイアン・スネ夫・しずか・ドラえもんの声が
カラクサタウンの広場に
響き渡った。

第５話―対決・のび太ＶＳＮ！―（後書き）

一人称

のび太→僕

スネ夫→ぼく

ドラえもん→ボク

しずか→私

ジャイアン→俺

今回は会話が多かったので

一人称の説明をしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1316z/

ドラポケストーリー

2011年12月15日00時49分発行